

「おかえり」紙灯笼に込め



震災遺構「大川小」の中庭に並ぶ紙灯笼を眺める只野さん(右)

石巻・震災遺構「大川小」

卒業生ら追悼

東日本大震災の津波で児童・教職員計84人が犠牲になった石巻市の震災遺構「大川小」で14日、手作りの紙灯笼に明かりをともす「おかえりプロジェクト」が初めて開かれた。

卒業生らでつくる「Team (チーム) 大川 未来を拓くネットワーク」が犠牲者の追悼や元住民の集う場をつくろうと企画。高さ15センチほどの発光ダイオード(LED)照明に2枚の和紙を筒状にかぶせた灯笼計36

0個を並べた。

中庭では震災当時の児童数と同じ108個の紙灯笼を使い、児童がかつて探して遊んだ四つ葉のクローバーの形を表した。旧校舎西側には「おかえり」の文字を浮かび上がらせた。

紙灯笼にはチーム大川のメンバーや来場者らが「悲しみから笑顔に」「みんなが幸せで平和でありますように」といったメッセージや絵をかいた。今年6月にメンバーの講演を聞いた高

知県黒潮町の中学生もメッセージなどを寄せた。

石巻市の会社員政木宏和さん(46)は「大川小周辺は震災後に人が住めない災害危険区域になったので、卒業生が集まる場所をつくることは大切だと感じた」と話した。

チーム大川代表で、震災当時大川小5年だった只野哲也さん(22)は「震災前のように、訪れた子どもたちの笑い声が校舎に響いてうれしかった」と語った。